

千葉 稲城（ちば・いねしろ）

1、プロフィール

二度の上京を挟みながら、県内の各地で教鞭を執る。函館毎日新聞社入社後、明治40年11月から、新聞記者として活躍。代表作に、北海道の歴史を研究した「北海史談」がある。

<生没>

1873(明治6)年12月22日～1934(昭和9)年3月12日

<代表作>

「北海史談」第一集。明治43年。函館毎日新聞社蔵版。予定した第二集、第三集は未完に終わる。

<青森との関わり>

南津軽郡花巻村(現黒石市)生まれ。東英小学校準訓導をはじめ、県内各地の小学校で教鞭を執る。

2、作家解説

1873(明治6)年12月22日、南津軽郡花巻村(現黒石市)に生まれる。明治13年花巻小学校に入学。翌年、青森県庁から一等賞下賜があり、成績抜群で神童の名が高かった。23年黒石小学校を卒業後、青森県立中学校二年に編入学したが、中途退学。24年上京。国学院国文科入学。一年で病気退学、帰郷。26年東英小学校準訓導として採用される。以後、三つの小学校の訓導を経て、30年再上京し、東京帝国大学文科大学教授で文学博士物集高見方に寄寓、書生として直接薫陶を受けながら、早稲田専門学校文科一年に入学。31年再度帰郷し、二つの小学校を経て、36年大湊小学校に校長として赴任。38年まで在職する。

稲城が教職と本州を離れて渡道し、函館毎日新聞社に入社後、新聞記者として活躍したのは40年11からであった。主任記者として「北海史談」を連載、好評を博し、43年、第一集として刊行、主著となる。翌44年には「東宮殿下行啓記念、

函館奉迎記」、大正 10 年に「最近富之北海道」、同 14 年には「北海道名旧蹟」を刊行している。

主著「北海史談」の序文に、遠藤隆吉文学博士が「昨年夏偶函館に赴き留まる事旬日、函館毎日新聞紙連載する所の、北海史談なる者を見るに、北海の史蹟を詳述し、蝦夷の風俗神話に及び、文章流暢にして記事亦豊富」「人の知らざる所に向ひ綿密なる注意と、博厚なる知識とを以て此書を編せらる」と述べている。

また、稲城は「散逸せる史料を以て完璧を望むは実に一朝一夕の業にあらず唯予の期する所は荆棘蓬々たる本道歴史の研究に一條の徑路を拓き後の学者として其奥を窺ひ」「俱に研究の歩を進めて史実を闡明せらんことを敢へて江湖に懇ふ」と「編者の告白」で結んでいる。

社内にては主筆、相談役として重きをなし、対外的にも広範囲に活動し、その後、北海水産新聞社嘱託を昭和6年に退職し、昭和9年3月 12 日死去す。享年 62。

3、資料紹介

○「北海史談」

図書

1910(明治 43)年

「北海史談」第一集。明治 43 年。函館毎日新聞社蔵版。

全編九章からなる。総論、渡島蝦夷、胡奢魔允之乱、松前家の一統、国縫の大戦、瀬棚の戦争、国後の蝦夷騒動、松前世家、門昌庵の九章である。北海道の歴史を記した書である。